

平成二十四年十一月十一日（日）曇り後雨

文語の苑十周年を迎へ、昨年に續き今年も東洋大學にて第二回シンポジウムを開催すると共に、大阪教育大學の御協力をいたゞき、初めての關西シンポジウムの企畫となれり。同大學教養學科の瀧 一郎教授夙に文語の復興に心を寄せ給ひ、學内に文語俱樂部を設置し、その指導にも盡瘁せられあるに加へ、曾てお茶の水女子大學にて文語俱樂部茶苑の初代幹事にして卒業後は關西の小林聖心女子學園（をばやし）に教諭として奉職中の田嶋眞貴子さんの活動もありて、一氣にシンポジウム開催の具體化進みけり。

小生春に心臓冠動脈の治療を受けたるも、六ヶ月後の検査異常なく、講演を引受く。大阪に因みて「難波の僧契沖を讀む」と題して和字正濫鈔の序を解説せむとす。

當日は雨との豫報あり、参加者の出足も氣になりたるも、豫定時刻の近づくに従ひ、會場の音樂館内の席は順調に埋り始む（うづも）。文語の苑發足時の幹事にして現在京都在住の井上仁美さんを始め關西の懐しき方々とも再會を果す。控室にては同大學茶道部員の點つる茶も振舞はれ、和やかなる雰圍氣の裡に開會となる。

共催者を代表して、瀧教授、愛甲代表幹事が文語の重要性に就き交々語らる、中に、愛甲幹事冒頭に平家物語宇治川の先陣の一節朗々と披露し、文語モード全開となる。續きて熊澤南水先生樋口一葉の十三夜の口演、原文の言葉遣ひその儘に主人公お關離縁の覺悟を實家に告げむとするを父親に諭され翻意する件り、地の文は文語にてあるも、科白は當時の口語に近く耳に親しみ易く筋書良く通ず。

これにて一旦休憩に入り、茶道部の諸子再び茶を點て参加者に勧む。この間に教養學科長 高橋 誠教授に御挨拶、瀧教授の今回の催しに大いに賛同せられあるを感じ、會の成功を喜ぶ。

時刻は既に午後四時十分、終了まで五十分を残すのみとなれり。我が講演事前の持時間は最長九十分なれば、大幅の短縮を要すと思はる、に、瀧教授泰然として、豫定通りの講演行ふべしと曰ふ（のたま）。今回の講演にては、御参加の皆様と和製漢文の原文を音讀俱にして、契沖の長きに亙る佛道修行を通じての梵文（サンスクリット）の學識と、更には萬葉代匠記精撰を通じての日本古典の研究に基く、國語への深き理解と愛情とを以てせるその假名遣論の本質を傳へむとの意圖あれば、先生の御言葉有難く拜受、旁々この序の原漢文を映寫するに、大阪大學大学院生小田昇平さんの畫像捌き絶妙にして、豫定通りの内容七十分にて拙講を終ふ。然れども既に終了時間を超過、御参加の方々の御寛恕ありたるも、やはり時間短縮の努力足らずと言はざるを得ず。加へて原文の音讀に於て佛語の吳音讀みに不徹底の御指摘を頂く等反省點多かりけり。

次の田嶋元茶苑幹事らによる武滿徹のヴァイオリン演奏は好評にて、更に質疑應答まで無事進行し、全體として盛會に終るを得たり。偏へに瀧教授を始め大阪教育大學關係者の方々、關西文語活動に御盡力の方々の御準備の御蔭様と感謝あるのみ。